

# 教科教育研修課の全体論

## 研究主題 「思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する研究」(1年次)

### I 研究全体の概要

#### 1 思考力・判断力・表現力の育成とその評価の重要性

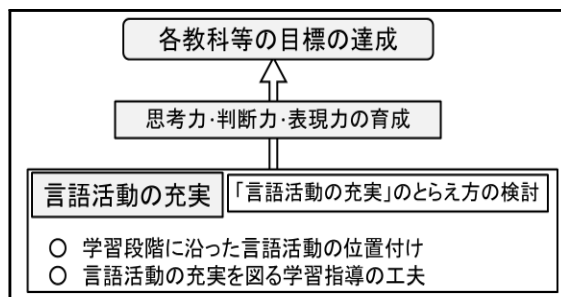
##### (1) 思考力・判断力・表現力育成の意義

新しい知識・情報・技術が飛躍的に重要性を増す知識基盤社会といわれる社会においては、「生きる力」をはぐくむ理念に基づき、確かな学力を身に付けさせることが一層求められている。児童生徒が生涯において、自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決するための思考力・判断力・表現力が必要である。

学校教育法及び学習指導要領においては、学力の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、③学習意欲の三つが示されている。思考力・判断力・表現力を育成するためには、課題に向き合い、解決方法を考え判断し、その思考の過程を自覚的に経て、考え方を表現する一連の学習を意図的に行うことであり、このような学習過程によって学習意欲の向上も期待される。

##### (2) 平成21・22年度の研究

これまでの調査研究では、「自ら考え判断し、表現できる力」の育成を目指し、主体的に学習に取り組む態度を基盤とした思考力・判断力・表現力の向上を「言語活動の充実」を通して行う研究を進めてきた。言語活動に着目したのは、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、課題を解決するための思考、判断、表現は言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力であると考えられるからである。言語活動において、児童生徒が思考したことを互いに伝え合うことなどにより、考えが広がったり、深まったりするとともに、表現を基に思考を整理したり、明確にしたりすることができると考えられる。このような考えに基づき、これまでの言語活動を見直すとの考え方や視点を教科等の特性に合わせて明確にすることで、思考力・判断力・表現力の育成が図られると考え、各教科等で実践研究に取り組んだ。



具体的な取組として、これまでの言語活動を見直し、表1のように各教科等における思考力・判断力・表現力

図1 思考力・判断力・表現力の育成と言語活動の充実

を育成するための「言語活動の充実」のとりえ方を明確にした。これに基づき、教科等の特性に応じて、言語活動を年間指導計画や単元の指導計画に効果的に位置付けたり、実際の学習指導を具体化したりするなどして、児童生徒がよく考え、表現する授業の充実を図ることができた。(図1)

表1 各教科等の「言語活動の充実」のとりえ方

教科等	「言語活動の充実」のとりえ方
国語科	各領域において、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、日常生活や社会生活に必要とされる記録、説明、報告、感想、討論などの言語活動例を学校や児童生徒の実態に応じて具体化し、充実すること。
社会・地歴・公民科	地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視すること。
算数・数学科	言葉や数、式、図、表、グラフなどの数学的な表現を用いて解決の方法を考えたり、自分の考えを筋道を立てて、根拠を明らかにして相手に分かりやすく説明したり、互いに考えを表現し伝え合ったりするなどの学習活動を充実すること。
理科	問題を見だし観察、実験を計画する学習活動、観察、実験の結果を分析し解釈する学習活動や、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動を充実すること。
外国語活動	コミュニケーションを図る楽しさを体験することを目的として、身近な外国語に慣れ親しんだり、伝え方を工夫したりする活動を充実すること。
外国語科	聞いたり、読んだりして理解した内容等について、自分の体験や知識などと結び付けながら考えたことを、話したり、書いたりして表現するなど4技能を統合的に活用する活動を充実すること。

一方、「言語活動の充実」を図ることによる児童生徒の変容の見取りの工夫については課題が残されている。「言語活動の充実」により、児童生徒の発言や表現内容から思考力・判断力・表現力の高まりを感じることはできるが、授業のねらいに沿って思考したり、表現したりする力が十分に身に付いたのかということについては、あいまいな点が残る。これは言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力が高まった児童生徒の姿を具体的に想定していなかったことがその要因として考えられる。本来、思考力・判断力・表現力の育成には、長期的な見通しをもって指導していく必要があるが、単元や1単位時間といった短い期間であっても言語活動等の中で、児童生徒がどのように思考・判断・表現したかを適切に評価し、個に応じた指導の充実や指導改善に生かすことが大切である。

## 2 指導と評価の一体化

### (1) 評価の意義と評価改善の考え方

学習評価は、学習指導と一体的に行うことにより、児童生徒一人一人に学習内容の確実な定着を図り、授業改善に寄与することができる。具体的には、学習指導要領に示す内容を確実に習得したかを、目標に照らして観点ごとに見取り、習熟の程度や個に応じた指導に生かすことである。

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」

(中教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成22年3月)

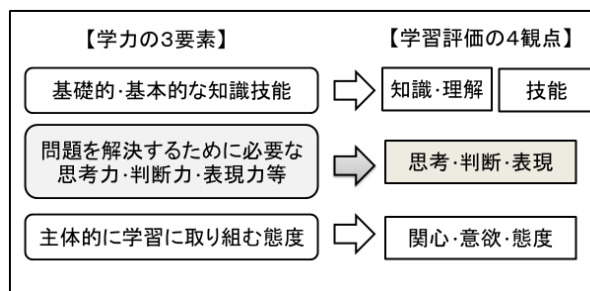


図2 学力の3要素と学習評価の4観点

においては、学習指導要領の目標に照らしてその実現状況を観点別に評価し、目標に準拠した評価を引き続き実施することが示されている。図2は、前述の「学力の3要素」と学習評価の4観点との関係を図式化したものである。

### (2) 「思考・判断・表現」の評価

知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力は、主として言語活動で育成される能力であることから、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点を「思考・判断・表現」において評価することが適当である。これは、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な活動の評価ではなく、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科等の学習内容等に即して思考・判断したことを、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動等を通じて評価することである。

具体的には、言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品と一体的に評価を行うことや結果だけでなく過程を含めて学習状況の目標に照らしてその実現状況を評価することが重要である。

## 3 「思考・判断・表現」の評価の実際

### (1) 言語活動等を通じた見取り

児童生徒の思考等の高まりを的確に評価するため、各教科の内容に即した言語活動等における発表内容や作品等を評価の対象とし、これまでも評価規準を設定して実施してきた。しかし、思考や判断の状況は、量的な基準で測ることが難しいこともあり、評価規準を設定しても思考・判断の程度をとらえるにはその判別があいまいな場合が多かった。

そこで、児童生徒の思考・判断の過程やその結果としての表現を質的、量的な面からよりよく評価するために「思考・判断・表現」の評価規準に加え、目標の達成の度合いを判断するためのめやすとして判断基準を設定することとした。

### (2) 判断基準の設定

本研究における判断基準は、評価規準で設定された児童生徒の「思考・判断・表現」の学習状況を、より分析的に表した「判断の要素」を具体化した尺度である。図3にあるように、判断基準(B)は、評価規準を分析的に表した判断の各要素を、「おおむね満足できる」具体的な状況で表したものである。例えば、児童生徒が考えたことを発表するという言語活動において、評価規準に基づき、「発表内容」「発表内容の構成」「発表の方法」などが判断の要素であると考えた場合、これらに対応する判

判断基準（B）は、「テーマに基づいた視点の有無」「意見とその根拠や例示という構成の有無」「グラフなどの情報の提示の有無」等が考えられる。判断基準（B）により、児童生徒の「思考・判断・表現」の状況を読み取り、「十分満足できる状況」と判断されるものをA、「おおむね満足できる状況」をB、「努力を要する状況」をCと評価する。また、判断基準（B）の設定においては、より信頼性を高めるために想定される児童生徒の表現内容等も併記する。

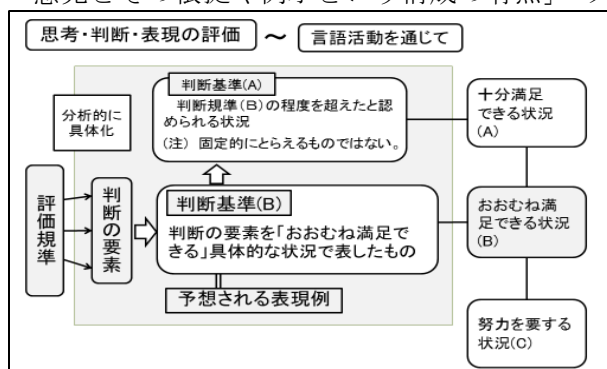


図3 「思考・判断・表現」の評価と判断基準

判断基準（A）は、判断基準（B）に照らして、その程度を超えたと認められる状況を表したものである。指導者が児童生徒の目標達成状況を見て、さらなる指導を行う場合の学習状況の程度及びその他、「おおむね満足できる」学習状況以上にあると認められるものを判断基準（A）とする。「十分満足できる」児童生徒の姿は、多岐にわたることが想定されるため固定的にはとらえず、児童生徒の学習状況を見て判断することも必要である。

#### 4 評価を生かした授業づくり

##### (1) 判断基準及び「予想される表現例」等を生かした授業づくり

判断基準は、「思考・判断・表現」の評価に活用することのみを目的とするのではなく、言語活動に至るまでの指導を充実させるための重要なポイントとして設定する。

例えば、思考、判断し表現する力は、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な能力であることから、実際の言語活動の前提となる「課題を的確に把握できるか」、「課題解決のために必要な知識や技能が身に付いているか」などを明確にした上で、適切に指導を行うことが必要である。そのため、教材研究時に、評価規準から導き出された判断の要素から「判断基準」や「予想される表現例」をあらかじめ設定し、言語活動に至るまでの過程や児童生徒の具体的な言語活動の姿を想定することで、指導と評価の一体化を図ることができると考える。（図4）

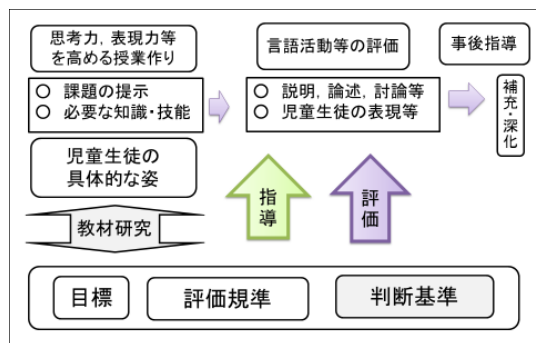


図4 思考・判断・表現の評価を生かした指導

##### (2) 補充・深化指導

評価を指導に生かすには、「努力を要する」と判断される児童生徒への補充指導が極めて大切であり、判断基準（B）を基に、考え方や具体例を示して、補充指導を行う必要がある。また、取り扱う題材や学習の状況により「おおむね満足できる」と判断される児童生徒への深化指導についてもあらかじめ考えておくことが有益である。「思考・判断・表現」の評価規準に基いた判断基準等を指導のポイントとして生かすことができると考えられる。（図4）

#### 5 本年度の取組

##### (1) 学習評価に関する実態調査

思考力・判断力・表現力の育成に係る言語活動等の実施状況とその評価を中心に県内の実態を把握するため、県内全国公立小・中・高等学校及び特別支援学校にアンケート調査を実施した。

##### (2) 「思考・判断・表現」の評価と指導に関する基本的な考え方の構築

各教科等の特性を踏まえ、各観点における「思考・判断・表現」の位置付け及び思考・判断の過程やその結果としての表現を質的な面からよりよく評価するための理論を構築した。

##### (3) 研究協力員による検証授業

「思考・判断・表現」における判断基準を生かした指導を行い、本研究の考え方を検証した。